

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄首里方言におけるヴォイスと利益性の記述文法研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 當山, 奈那, Toyama, Nana メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/30817">http://hdl.handle.net/20.500.12000/30817</a>

琉球大学大学院  
人文社会科学研究所委員会 殿

博士論文審査委員会

主査 狩俣 繁久

副査 石原 昌英

副査 宮平 勝行



学位（博士）論文審査の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、学位論文の審査を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号	128095D	学生氏名	當山奈那
人文社会科学研究所 比較地域文化専攻		主指導教員	狩俣繁久
		副指導教員	石原昌英・宮平勝行
成績評価	学位論文	(合格) 不合格	
論文題目	沖縄首里方言のヴォイスと利益性の記述文法研究		
審査要旨	<p>本博士論文は沖縄首里方言のヴォイスと利益性を中心にした構文論に関する記述研究である。</p> <p>第1章では社会言語学的な手法や用語を援用しながら、これまで「首里方言」とのみ括られてきた方言には「首里地域方言」、「首里階層方言」、「首里那覇社会方言」の三つがあることを論じている。第2章は首里方言の形態論の概観である。琉球大学附属図書館の琉球語音声DB、その他の文献資料、面接調査資料から用例を抽出し、名詞の格ととりたて、動詞の活用タイプと各活用形の文法的な意味など、各品詞の形態論的な特徴について概観している。第3章では首里方言の他動性について、動詞の自他対応の特徴や他動詞構文と使役構文の連続性について論述し、首里方言が他動化優勢の言語であることを論じている。第4章では首里方言に存在する三つの使役動詞ごとにその構文論的な特徴を記述している。また、第二使役動詞構文と第三使役動詞構文が特定の条件下で受益表現にずれていくことを論じている。第5章では直接対象の受け身、相手対象の受け身、所有物の受け身の三つのタイプの受動構文の構造を記述し、現代日本語に存在する第三者受け身の構文が見られないことを論じている。そして、受動構文が意味構造上利益性に関して中立であることを明らかにしている。第6章では動詞の語彙体系の中で授受動詞の意味記述を行い、補助動詞としての授受動詞、それを述語にする授受構文が未発達で、現代日本語のような授受のカテゴリーが見られないことを論じている。終章は、第4章から第6章を中心に総括し、使役と受動と授受の相関性を考察し、首里方言固有のヴォイス体系と利益性の特徴をまとめている。</p> <p>本博士論文は、①首里方言が言語類型論的に他動化優勢の言語であること、②他動詞派生接辞と使役動詞派生接辞が起源的に同一のものであること、③使役動詞の三つの形式が&lt;強制・指令&gt;、&lt;許可・放任&gt;の構文論的意味の表現に関与していること、④第三使役動詞構文が&lt;間接使役&gt;という言語類型論的にみて類例の少ない構文の述語形式であること、⑤使役と受動がヴォイスのカテゴリーに属しながら利益性にまでふみこんでくる現代日本語の使役や受動とは異なり、首里方言の使役と受動は利益性に関して中立的であり、ヴォイスのみを問題とすること、⑥授受構文が動詞の文法的な形式としても意味としても発達しておらず、文法的なカテゴリーとして非体系的であること、⑦首里方言が使役も受動も利益性を獲得せず、第三者主語の受動文も生じなかったこと、⑧現代日本語と比較した上で、授受構文が発達しなかったのは授受に人称制限が起らなかったことが原因であること、⑨授受構文が発達しなかったのは、シテモラウ相当形式が欠如していることに起因すること、⑩利益性が発達しなかったことが第三者主語受動文を発達させなかった要因であること、⑪首里方言が授受表現発達の初期段階にあること等、多くの新知見を提出している。そのことを通して、現代日本語の授受動詞、授受構文が授受的補助動詞の人称制限から発生したと主張する狩野千紗子(2006)を支持する結論を示し、日本語授受研究への一定の寄与も認められる。</p> <p>本博士論文の資料収集方法が沖縄芝居脚本などの談話資料と面接調査の利点を生かしたものであること、ヴォイス、利益性に関する日本語文法の先行研究を丹念に渉猟したうえで論を進めていること、首里方言を独立の言語と認め、固有の言語体系の記述に成功していることも高く評価できるものである。あわせて、本博士論文が首里方言研究の最も詳細な研究の成果としてだけでなく、琉球諸方言の構文論研究への貢献、日本語ヴォイス研究への一定の貢献もなすものであることも認められる。博士論文審査会は、本博士論文が博士の学位論文に値すると判断する。</p>		

琉球大学大学院  
人文社会科学研究科委員会 殿

博士論文審査委員会

主査 \_\_\_\_\_ 狩俣 繁久 \_\_\_\_\_

副査 \_\_\_\_\_ 石原 昌英 \_\_\_\_\_

副査 \_\_\_\_\_ 宮平 勝行 \_\_\_\_\_



### 最終試験の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、最終試験を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号	128095D	学生氏名	當山奈那
人文社会科学研究科 比較地域文化専攻		主指導教員	狩俣繁久
		副指導教員	石原昌英・宮平勝行
成績評価	最終試験	合格	不合格
結果 要 旨	<p>副査・石原昌英の総括のもとで、申請のあった博士論文の内容とそれに関連する授業科目についての口頭による最終試験を行なった。</p> <p>本論文の題目は、『沖縄首里方言のヴォイスと利益性の記述文法研究』である。以下の4点を軸に試験を行なった。</p> <p>まず、口頭試問（面接審査）での関連質問を行ない、本博士論文が学位の水準に達していることを確認した。次に、本博士論文に関する基礎的な専門知識や論文の研究上の位置づけを問い、研究上の貢献のあったことを確認した。そして、本博士論文で取り上げた研究分野に関連する授業科目「琉球方言音韻研究特論・演習」「比較地域文化特別研究」「比較地域文化総合演習」などの履修によって得た視点、そして、全国学会での数回の研究発表や査読付きの全国学会学術雑誌などへの論文投稿、地方学会での研究発表や論文投稿も積極的に行なっていること等々、学位にふさわしい研究能力とその学識を有していることを確認した。</p> <p>以上の点から、本審査委員会は当該学生が学位の水準に達していると認め、最終試験に合格したと判断する。</p>		